

唐古遺跡出土の縄文ある弥生土器

伊藤 淳史

一 はじめに

物質的資料を研究材料とする考古学は、遺物の移動を把握することによって、過去の人や情報の移動を探るおもな手がかりとしている。なかでも容器としての土器は、日常生活に密着した量的に豊富な生産物であるうえに、腐朽することなくほぼ遺存することから、過去の社会の基層的部分の移動と交流の様相を検討するうえで、好適な資料と言える。ここでは、京都大学総合博物館所蔵の唐古遺跡出土土器に含まれていた、他地域から搬入された可能性の高い土器二点を紹介する。ささやかな資料だが、弥生時代における地域間交流、なかでも東西弥生社会間の移動と交渉の一端について、検討材料を提出できれば、と考えるものである。

二 経緯と経過

唐古遺跡は、奈良県磯城郡田原本町に所在し、奈良盆地中央を北流する初瀬川が形成した沖積低地に立地する(図1)。昭和一二(一九三七)年に京都帝国大学考古学教室と奈良県がおこなった唐古池の発掘調査によって、弥生時代全時期にわたる多数の竪穴と多様な遺物が出土した。なかでも多数の木製農耕具や炭化米の存在は、稲作農耕社会としての弥生時代像を確かなものとして証明した重要な意義を持っている。発掘報告書は昭和一八(一九四三)年に刊行され(以下、同書を『唐古』と表記する)^①、そこで採用された出土土器にもとづく第一様式〜第五様式の区分と変遷観は、近畿地方弥生土器の編年序列の基本として現在に至るとともに、列島弥生時代の時期区分の枠組みともなっている。すな



図1 関連遺跡位置（縮尺1/300万）

わち、唐古遺跡の調査と報告は、現在の弥生時代研究の基礎を据えたと評価できるのである。なお、遺跡は戦後の調査によって、南方の鍵池周辺も含んだ大規模集落であることが判明しており、現在は「唐古・鍵遺跡」と呼称され、中心部分は国指定史跡となっている。^②

その『唐古』には、縄文を施した土器片二点の存在が報告され、「縄文式土器との交渉が考慮されねばならぬ」（同書一四二頁）などと記載されている。さきに挙げた、明らかな搬入土器二点の

ことである。近畿地方においては、おむね縄文時代後期末以降、土器文様として縄文は完全に失われている。出土状況の呈示が無いために異なる時代のものの混入品であることを否定できない、という批判がなされる余地はあるものの、弥生時代においても縄文技術を持っていた文化圏との交渉に注意を促した点、評価される記述であると考えたい。しかしながら、報告での呈示は資料の一部分の写真のみにとどまるものであり、大きさや形状、観察できる調整技法や質感といった基本的な情報を一切欠いていた。当初より外来の土器として注意されながら、戦後も「尾張以東の弥生人との交渉を示す資料」などと漠然と認識される程度にとどまり、学術的に活用されてこなかった理由がここにある。

筆者は、かつて、弥生時代の地域間交流の証左としての土器の移動状況に関心を寄せ、近畿地方以东より搬入されている弥生時代前〜中期の土器について集成を試みたことがあった^④。その際、唐古遺跡の当該資料（資料1・2）も子細に観察し、実測図として資料化する機会を得た。本稿でそれを提出し、今後の考古資料としての活用の一助とするとともに、資料の位置づけについても手短ながら愚考を書き留めることで、諸賢の批判を仰ぐものである。なお、研究者名の敬称は略させていただきます。ご寛恕いただきたい。

① 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』

(京都帝国大学文学部考古学研究报告第十六册)、一九四三年。

② 戦後の調査も含めた学史的な整理は、以下に詳しくまとめられている。

豆谷和之「調査研究のあゆみ」『唐古・鍵遺跡Ⅰ——範囲確認調査

——遺構・主要遺物編』田原本町教育委員会編(田原本町文化財調査報告書第5集)、二〇〇九年。

③ 石野博信「大和唐古・鍵遺跡とその周辺」『橿原考古学研究所論集』四、一九七九年、二五頁。

④ 伊藤淳史「弥生時代における地方間交流——伊勢湾地方弥生土器の型式変化と移動——」『史林』七七巻四号、一九九四年。

三 資料の詳細と評価

(一) 資料1の詳細(図2)

『唐古』図版第四三―三に掲載の資料。7センチ四方程度の破片で、壺の胴部上半、おおむね頸部として直線的に立ち上がりかける部位から下の破片である。最も遺存している部位でも径全体の四分の一程度しかないので、実測図は、破片の湾曲度から径と傾きを少々強引に復元した。そのため厳密なものとは言えないけれども、頸部径は4センチ、残存範囲での胴部径は15センチ程度をはかる。器形としては、尾張地域の弥生時代中期中葉で「貝田

町式」と呼ばれる土器群に特徴的な細頸壺に相当するといえ、^①類例をもとに全形を想定すると、器高20センチ強、最大径16センチ程度の、わずかな丸みを帯びたやや下ぶくれの胴部をもつものになるとみている。

外面の文様は、上下を沈線により区画した縄文帯である。2帯が確認でき、さらに最上部の沈線の上側にもかすかに縄文が認められるので、頸部側にも施文されていたことは確実である。沈線区画の縄文帯間は横位に丁寧な研磨を加えた「磨消縄文」である。また縄文帯上には、やや太めの縦位沈線四本による区画が施されているが、確認できるのは一カ所のみであって、各帯にあったものか、また全周を何分割したのかはわからない。これらの施文順序を整理すると、縄文帯施文↓上下を沈線区画↓縦位区画線付加↓文様帯間研磨、という工程になる。縄文は、節が非常に細かなLR。それ以上の原体復元は筆者には難しいが、節の深淺の状況からみて、2センチ強の原体一条を、二本の指を用いて器面上を転がしたのではないかと推定している。なお、以上のほか、縄文帯上には非常に細いひっかき傷状の縦位弧線三条が、二カ所にみられる。製作の最終局面で加わった小形獣の爪痕など、意図せざる痕跡であった可能性が高い。^②

内面は、頸部側に縦位の皺と細かな凹凸が著しく認められ、そ

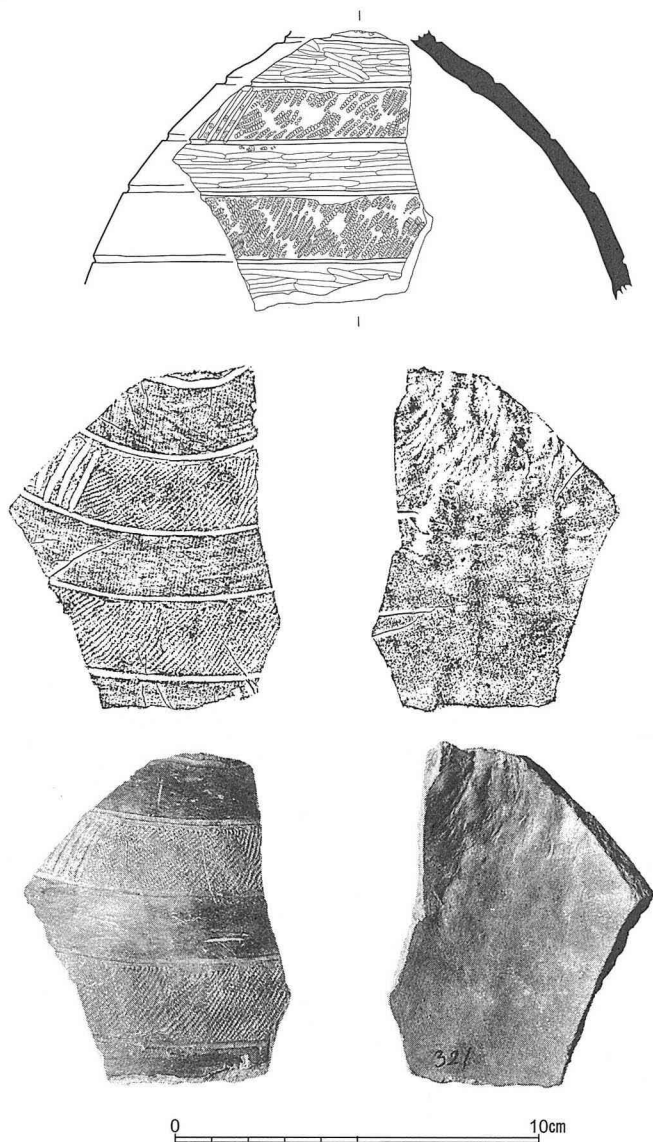


図2 資料1実測図・拓影・写真（縮尺1/2）

れ以外の範囲も緩やかな凹凸が、水平に連続している。前者は、頸部の絞り込みにもなう曲げ皺に類するものと解釈でき、後者は、製作時の粘土紐積み上げに際して指頭で押さえたなごりであろう。表面は丁寧に撫でられており、刷毛や削りといった工具による痕跡は認められない。

色調は、外面が、暗赤褐色から黒褐色へと漸移的に移行するような部位に相当しており、総じて筥による磨研が映えている。

『新版標準土色帖二〇〇七年版』に従うと、にぶい赤褐(2.5 Y R 4/4) から赤黒(2.5 Y R 2/1)にあたる。内面は全体が灰褐色で、灰褐(5 Y R 6/2)。胎土は非常に精良で、ごく微量の赤色班粒を認める以外は、砂粒を含んでいない。焼成も弥生土器としては非常に堅緻な部類といえる。

(二) 資料1の位置づけ

この資料の内面には、細筆により「321」と墨書きされたマーキングがある。遺物整理時の記号と思われるが、残念ながら調べきれておらず、意味はわからない。この資料が示された図版第四三は、「第二様式壺形土器頸腹部文様」とキャプションが付けられ、文様部分の実大写真が九例(1…突帯文、2…篋描文、3…縄文、4…9…各種櫛描文様)掲載されている。このことが

「第二様式の土器に共伴した」^④と誤解を招いたとみられるが、出土遺構や状況について報告に記載は無い。ただし、「第二様式土器に一例を検出した磨消縄文帯を有する土器等(図版第四三・8・9)もまた、文様帯中に篋描の縦線を配するといふ細部に至るまで、同じく伊勢湾地方の併行様式中に盛行する手法と一致するものである」(『唐古』一四二頁)とあるように、報告者(小林行雄)が、本例が第二様式に位置づけられる伊勢湾地方からの搬入品と認識していたことは明らかである。

小林は、唐古遺跡の調査以前より、伊勢湾地方弥生土器の示す東西日本の交流様相に強く関心を抱いており、名古屋市西志賀貝塚などの資料調査に自らあたるとともに、東京考古学会員として吉田富夫ら地元の研究者とも親しく交流していた。東京考古学会の雑誌『考古学』が昭和九年(一九三四)に発行した西志賀貝塚の特集号においては、本例と同種の縄文ある弥生土器が報告されている。^④こうした知見が唐古遺跡の報告にあたっても存分に發揮されたといえるが、この当時の小林は、『考古学』での論考の記載をみる限り、縄文より文様磨消技法や縦位区画線の存在に注目し、そこに伊勢湾地方との関連を考えていたようである。^⑤唐古の第二様式壺形土器には、櫛描文帯間を研磨する手法とともに、弧線

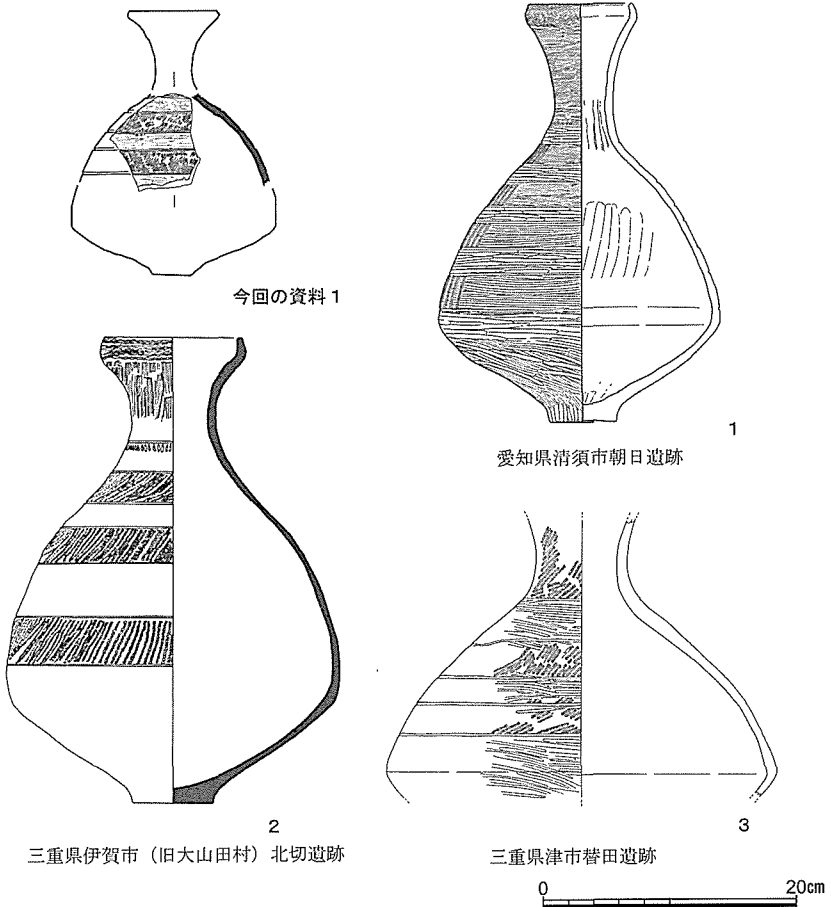


図3 尾張・伊勢・伊賀地域の細頸壺類例（縮尺1/6）

で縦位に画する流水文が顕著に認められる。伊勢湾地方の土器編年がこの段階でまだ整備されていないといった背景はあるにせよ、こうした類似が、本例を第二様式に位置づけ大きな理由であったとみたい。

それでは、現在の知見に照らして考えてみよう。さきに、器形として尾張地域の「貝田町式」細頸壺に相当するものと認定した。貝田町式は、尾張地域でもつばら用いられる土器型式名であるが、この種の細頸壺そのものは、伊勢湾西岸域にひろく分布が認められるものである（図3）。そして、柳描文帯や縄文帯、あるいは

は刷毛目調整痕などの上下を沈線で画してその間を丁寧に研磨する文様施文を特徴とする。成立直後の貝田町式細頸壺は直線的な胴部形態を呈しており、時期が下るとともに丸みを帯びてくることがわかっている。また、施文や研磨などは総じて省略化の流れがある。^⑥ 本例の場合、胴部に若干の膨らみを認める点からみて、成立直後よりはやや下る段階とみられる。けれども、丁寧な研磨の状況から、二分した場合の後半期までは下らない。前半期の新相、近年の区分では「貝田町式1b期」に相当するものとしたい。^⑦

そこで、貝田町式の近畿地方との時間的併行関係が問題となる。結論から述べると、唐古の第三様式、現在の近畿弥生土器編年の表記法にしたがうと、Ⅲ期に併行する時期となる。^⑧ 戦後の調査の進展と資料の蓄積により、貝田町式以前の尾張地域には、弥生前期に続いて伊勢湾的な櫛描文土器の成立として「朝日式」と呼ばれる土器型式の存在が確認され、おおむね近畿Ⅱ期に併行して位置づけられることになった。小林が想定したような、研磨や縦位区画をもつての同時性は採用できなくなったのである。受け口状口縁の細頸壺という特異な器形、篋描沈線区画や縄文の使用を特徴とする貝田町式は、むしろ近畿の櫛描文土器から大きく逸脱した土器群と言いうる。いささか想像をたくましくすると、櫛描文土器の成立として、少なからず近畿地方との影響関係が考慮され

る近畿Ⅱ期併行期ではなく、近畿弥生社会としてのまとまりが盛んに醸成されていたであろうⅢ期に、袂を分かつかのように東日本弥生社会の西端を特徴づけるような土器の成立を想定した方が、状況的にも理解しやすい。もちろん、後にも触れるが、近畿地方に搬入が確認される貝田町式やそれに関連するとみられる土器で、確実にⅡ期以前の資料と共存したものは無いことも、十分な傍証となる。本例は貝田町式でも前半期という評価なので、近畿地方ではⅢ期古段階、近年大和地域の資料をもとに提出されている編年区分に当てはめるならば、大和第三Ⅰ—Ⅲ—Ⅱ様式あたり、^⑩ となろう。

搬入土器として、その故地、すなわち製作地はどこであろうか。最も広くとると、この種の細頸壺の主體的分布範囲、旧国名でいうと尾張・伊勢・伊賀、といった空間になる。ただ、統計的な結果をふまえてはいないけれども、縄文施文という属性については、伊勢・伊賀地域周辺にやや出現頻度が高いという印象をもっている。これらの地域のうち、近畿地方との狭間にある内陸山間地の中期弥生土器について、「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」と呼び、波状や山形の口縁部、粗い刷毛調整や施文といった属性で特徴付ける理解がある。^⑪ 篋描や縄文の多用という特徴も、こうした土器群に比較的目立つことから、近年の報告では、縄文施文という特

徴のみでも「鈴鹿・信楽山地周辺」由来とくくられる傾向が生じている。^⑫ 誤りではないけれども限定もできない、というのが本当のところである。本例の場合、胴部のみで口縁部を欠くことから、それと決定づける根拠が得られない。ただ、尾張低地部の巨大集落である朝日遺跡出土の細頸壺内面は、顕著に爪先圧痕を残すことが特徴とされるけれども、本例には認められないので、朝日遺跡産の可能性は薄いとはいえる。したがって、消去法で残される地域を最も可能性高い場所とするならば、伊勢湾西岸域か、ということになるうか。さらに絞り込もうとすると、非常に精良な胎土と堅緻な焼成、色調の特徴などは、筆者がこれまで実見してきた伊勢地方内陸部の弥生土器とは趣を違えており、低地部・平野部の産品ではないだろうかとの感触はあるけれども、あくまで乏しい経験にもとづいた主観にとどまる。今後胎土の理化学的検討もふまえて、あらためて判断を下す必要がある。^⑬

(三) 資料2の詳細(図4)

『唐古』図版五三―1掲載の資料。6センチ四方程度の破片で、ゆるやかに「く」字状に外反する口縁部である。径を復元できるほど遺存していないけれども、やや胴の張る大きな鉢形の器形になるかと想定される。口縁端部は幅8ミリほどで弱い面をもち、

下方にわずかに肥厚する。面の中央付近が沈線状に浅く凹んでおり、その上から縄文施文(RL)されている。外面の口縁部下に、2センチ×3センチ程度の楕円形の表面剝離痕があり、その周縁部はわずかに粘土の盛り上がりも残ることから、貼付された把手や突起に類するものが剝離した痕跡とみなされる。調整は、外面が横位を中心とした鈍磨きで、内面も、口縁部付近は横位の磨き、それ以下は、粗く横位に撫でて平滑にされている。なお、外面の剝離部分には細かな筋状の撫で痕が認められるので、貼付前にされていた調整を知ることができる。

色調は、内外とも暗い灰色を基調としており、外面は褐灰(10 Y R 4 / 1)、内面はさらに暗く黒褐(10 Y R 3 / 1)。ただし、これは表面のみで、断面を見ると明黄褐(10 Y R 7 / 6)を呈している。焼成は堅緻で、胎土中には1ミリ程度までの石英砂粒若干と、きわめて微細な雲母片を全体に認める。

(四) 資料2の位置づけ

この資料の内面には、「13」の朱書がある。仮にこれが出土遺構であるとすれば、13号竪穴は弥生前期の竪穴として報告され、その時期の遺物しか出土していないようなので、本例も確実に前期の遺物と認定できる。しかし、『唐古』においては「なほ出土

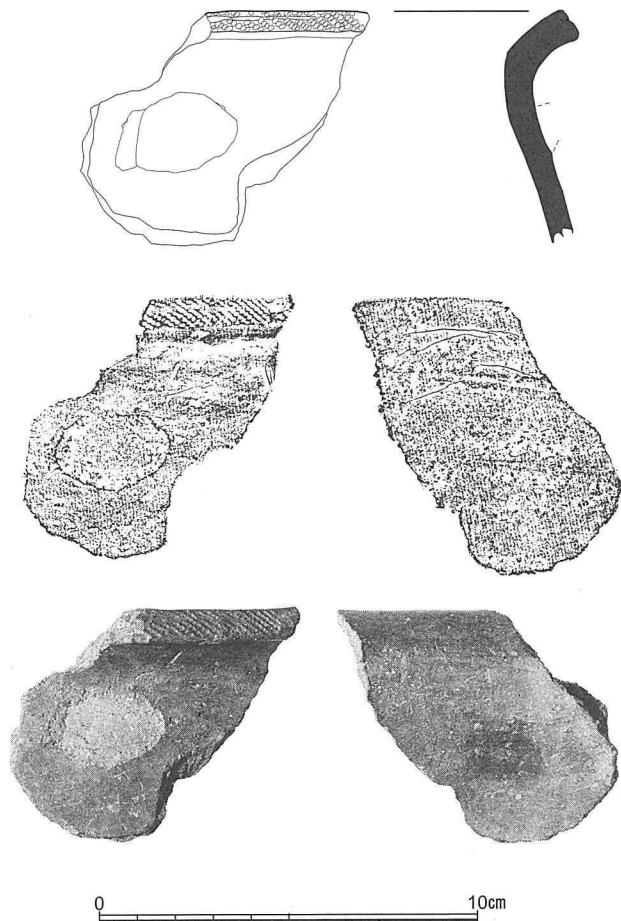


図4 資料2実測図・拓影・写真(縮尺1/2)

地點は不明であるが、瘤状把手を有する鉢形土器の口縁端部に縄文を印した一破片を發見してゐる(五六頁)と報告されており、また唐古遺跡遺物の朱書で出土遺構を示したものの多くは丸囲み数字で表記されていることを考慮すると、遺構や出土状況は不明と判断した方がよい。したがって、「第一様式の土器と共伴した」という紹介は誤りである。ただし、本例は、第一様式の鉢形土器として、頸部に瘤状把手を付している他の類例(『唐古』五五頁第四十六図)とともに報告されている。

実際、弥生前期の遠賀川式土器には大型の鉢形土器が組成しており、そのうちには瘤状の把手を付したのも珍しくはない。

本例を第一様式に位置づけたのは妥当な評価であり、現在の知見に照らしても大きな誤りとは言えない。敢えて付け加えるならば、本例のように口縁部に拡張気味の面をもたせて施文するようになるのは、遠賀川式土器の壺や鉢では新しい段階の傾向であることから、前期すなわち近畿Ⅰ期でも後半期以降の所産かとみられることである。また、続くⅡ期前葉ごろまでこの種の大型鉢は残存しているもので、時間幅をそこまで見積もってもよい、ということであろう。

しかし、さきに紹介した資料Ⅰと異なり、本例は近畿地方外でも類例が知られない土器である。口縁部端面の縄文施文を除けば、おそらくありきたりな鉢形土器として、注意されなかつた可能性が高い。表面の色調がやや暗めで、その点は他の第一様式資料と若干異なるけれども、積極的に外来的な要素と言えるほどでもない。にもかかわらず、その時期の近畿地方ではあり得ない縄文施文を採用しているのである。したがって、可能性としては2つが考えられる。弥生前期段階で細々ながら縄文施文技法が残存し、なおかつ遠賀川式土器が主体的に製作されている空間においてこの土器が製作され、唐古に持ち込まれた場合、もうひとつは、そうした空間から施文技術を有した人が移動してきて唐古で製作した場合、である。この識別は、土器胎土の鑑定にかかっているが、

筆者にはその鑑識眼はない。いずれにせよ、現状では、双方の技術が融合し得る空間は伊勢湾地方周辺、ということになろう。今後の類例発見が待たれるところである。

- ① 尾張地域の土器型式については、前掲第二章注④文献（伊藤一九九四年）参照。
 - ② 唐古・鍵遺跡第33次調査SK124出土の壺の器表面に、本例よりやや鋭いものであるが、同種の解釈がされた痕跡が報告されている。田原本町教育委員会編「唐古・鍵遺跡」第32・33次発掘調査概報」（田原本町埋蔵文化財調査概要二一）、一九九九年、第二一四―一六四年。
 - ③ 前掲第二章注③文献（石野一九七九年）。
 - ④ 藤沢一夫・小林行雄「尾張國西志賀の櫛目式土器」東京考古学会編『考古学』第五卷第二号（尾張西志賀発見弥生式土器研究）、一九三四年。
 - ⑤ ちなみに、『唐古』図版第四三で挙げられた縦位区画線をもつ残りの二例（8と9）のうち、現在の知見に照らすと、8は伊勢湾・近江地域の土器の可能性があるが、9は弥生中期後半の大和・河内地域に特徴的なものである。
 - ⑥ 注①文献に同じ。
 - ⑦ 石黒立人「貝田町式土器」生成論』愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第一号、二〇一〇年。
 - ⑧ 唐古第一〜第五様式は、戦後に第Ⅰ〜第Ⅴ様式と表記されるように、
- なお石黒は、同文献において、貝田町式の壺を特徴づける「付加沈線研磨手法」について、おもに尾張・知多・三河地域に分布する条痕紋系土器に由来を求め、縄文については尾張・北陸方面まで広域分布をみせる大地形土器との関連を示唆する。

なり、現在では時期区分を表すものとしてⅠ期Ⅴ期と表記し替えることが一般的となっている。ここでもその表記に従う。

⑩ 中村友博「土器様式変化の一研究——伊勢湾第一様式から伊勢湾第二様式へ——」『考古学論考』（小林行雄博士古稀記念論文集）、一九八二年。

⑪ 大和弥生文化の会編『奈良県の弥生土器集成 本文編』、二〇〇三年。

⑫ 石黒立人「鈴鹿・信楽山地周辺の土器——イメージとしての山——」『古代文化』第四四卷第八号、一九九二年。

⑬ 例えば、奈良県橿原市四分遺跡（西方官衙地区調査（第80）下層）で出土した、本例と類似する縄文施文の弥生土器胴部片について、「分布の主体は三重県鈴鹿山地から布引山地にある」との評価がみられる。

奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』二六、一九九六年、三七頁 fig. 2-1 a。

⑭ 前掲注⑦文献（石黒二〇一〇年）。

⑮ 本例には、鏡描による縦位区画線が施されていることも、もう一つの未解決の問題と言える。縄文帯施文の類例で縦位区画線をとまなうものは多くないからである。伊勢湾西岸産だとすれば、伊勢湾東岸部と三河地域との影響関係でこうした施文が採用されている、という説明は可能だろう。伊勢湾西岸部産の縄文施文の弥生土器の存在と特徴については、下記文献にも指摘がある。

石黒立人「朝日遺跡出土土器について」（財）愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡Ⅴ（土器編・総論編）』、一九九四年、二四九～二五〇頁。

⑯ 前掲注③文献（石野一九七九年）に同じ。

四 おわりに

以上、わずか2点の資料であるが、長々と紹介と愚考を連ねてきた。資料2についてはこれ以上の評価は難しいが、資料1についてはいささか補足しておきたい。

かつて筆者が探索して以降、この二〇年近くの期間における近畿・伊勢湾両地方における資料の蓄積は膨大なものに及んでいる。その後の追跡を怠っている中で、奈良県内各遺跡や戦後の唐古・鍵遺跡調査で出土した搬入土器については、詳細なデータが公表されている^①。それらに依れば、唐古・鍵遺跡を含めた大和地域で出土した弥生中期における東方からの搬入土器は、伊勢湾地方の貝田町式関連のものが多く、それも縄文施文のものがかなりの比率を占めていることがわかる^②。

一方で、この貝田町式の細頸壺は、滋賀県大津市南志賀遺跡で完形品が方形周溝墓に供献されているほか、明らかな模倣品が複数認定できるのをはじめ、滋賀県下でも出土例は多い。つまり、北側の近江地域にも確実に搬出され、影響を及ぼしているのである。しかしながら、この南滋賀遺跡例も含めて、いずれも柳井施文帯を沈線区画した文様構成をとるものであり、管見のおよぶ限りでは、縄文施文によるものの事例を知らない。おなじ貝田町式

関連の土器の搬出でありながら、近江と大和では明らかに傾向を違えているかに見られるのである。

仮に、特定の文様が一定の搬出先と対応するかのようなこうした傾向が正しいとするならば、縄文施文であることがなんらかの意味合いを持つていた、と考える余地が生まれるであろう。果たしてそれは何か。弥生時代の名阪国道とも言えるようなルートの情報伝達を担っていた集団を、表徴するものなのである。うか。はまた、受け手側、すなわち大和弥生人の嗜好を反映するものなのである。うか。ほぼ絶えてしまっただかに見える縄文施文が、命脈を保って再び頻繁に使用された事実そのものも興味深く、弥生水稲農耕社会における「縄文」というと、とかく対立や後進というイメージにとらわれがちとなるけれども、ここはまず丹念に事例を蓄積し検証していく姿勢が、やはり求められよう。それはもはや資料紹介の域を超えた作業ということになる。怠惰な筆者の今後の宿題として、拙い紹介の稿は閉じることにしたい。

① 橋本裕行「奈良県以東地域の搬入土器」大和弥生文化の会編『奈良県の弥生土器集成 本文編』二〇〇三年。

藤田三郎「搬入土器」『唐古・鍵遺跡Ⅰ—範囲確認調査—特殊遺物・考察編—』田原本町教育委員会編（田原本町文化財調査報告書第五集）、二〇〇九年。

② 例えば、前掲注①文献（藤田二〇〇九年）では、唐古・鍵遺跡出土

の搬入土器で、伊勢湾岸や伊賀・尾張地域からとされる関連資料は二九点報告される（遺物図版75頁78、P5481～5501、P5527～P5533）。うち、縄文施文のものは一九点である。

③ 大津市教育委員会「大津市南志賀遺跡調査概報」一九五九年。

同書中に報告のうち、図Ⅷ-16は明らかに搬入品、17～19を模倣品と評価できる。

〔挿図出典〕

図1・2・4筆者作成・撮影。ただし、図2・4実測図のイラストレートレイスは、佐々木夏妃（京都大学大学院文学研究科）による。

図3

1…（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター「朝日遺跡」Ⅷ、（本文編）、二〇〇九年、一二九頁605

2…三重県教育委員会「昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」、一九八四年、第8～7図46。

3…三重県埋蔵文化財センター「替田遺跡（第1・2次）発掘調査報告」、二〇〇八年、第三六図123。

（付記） 本稿入稿後の二〇一三年二月に、田原本町職員として唐古・鍵遺跡の調査研究と史跡整備に尽力されていた豆谷和之氏の訃報に接することになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（京都大学文化財総合研究センター助教）